

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：33902

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K18701

研究課題名(和文) 文化的規範の学習過程を探る

研究課題名(英文) Investigating the process of cultural norm learning

研究代表者

鶴田 早織(塚本早織)(Tsukamoto, Saori)

愛知学院大学・心理学部・講師

研究者番号：80794073

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,800,000円

研究成果の概要(和文)：グローバル化やテクノロジーの発展に伴い、今や誰もが「異文化」に接する機会を経験する可能性がある。本研究では、異文化を新規な行動パターンと定義し、実証実験を行った。参加者には架空の異文化についてシナリオを呈示し、行動例およびその行動に対する社会的フィードバック(肯定・否定)により規範の学習を促した。研究の結果、1)異文化間の差異を尊重する態度は、規範の帰納的な推論成績と関連したこと、2)行動に対する報酬のほうが罰よりも異文化規範の学習を促進したこと、3)相互協調的自己観の高さが学習プロセスの効果进行调整したこと、および4)敏感な感情反応を示す人ほど学習成果が高かったことなどが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

異文化適応に関する研究には、質問紙や面接調査を用いた臨床的な事例報告が多い。一方で当該研究は、文化規範の獲得についての心理学的プロセスを明らかにするために、社会的フィードバックによる強化学習のメカニズムを応用した実証実験を行った。社会的フィードバックの効果および異文化適応の個人差の関係について得られた新たな研究知見は、基礎および臨床の両側面から文化学習の理論構築に寄与するものと考えられる。社会的報酬の程度や種類が、どのように行動選択を調整し、さらに神経メカニズムにどのような影響を与えるのかといった生理心理学的知見の構築は今後の課題である。

研究成果の概要(英文)：In an age of globalization, people of diverse cultures interact with each other. Current study aimed to examine the psychological processes involved in learning about different cultures. Participants observed behavioral patterns and asked to make inductive inferences about the cultural norms underlying them. The study found that individuals with respectful attitudes towards different cultures scored higher on the induction task. Positive feedback for norm-consistent behaviors also facilitated it. The strength of one's interdependent self-construal moderated the effect of feedback on effective cultural learning. Additionally, emotionally sensitive individuals scored higher on inductive reasoning. Overall, the findings suggest that intercultural learning is a complex process that is influenced by a range of psychological factors. These findings have important implications for individuals and organizations seeking to promote intercultural understanding and collaboration.

研究分野：社会心理学

キーワード：規範 学習 異文化

## 1. 研究開始当初の背景

異文化間の交流が盛んな現代社会においては、未知の文化規範を学習する能力や動機の強さにかかわらず、多くの人がある機会を得る可能性がある。異文化における適応を促進するためには、文化的価値観や規範の学習過程に関する心理メカニズムを精緻に解明することの社会的意義があると考えた。

文化規範の学習には複雑かつ高度なプロセスが関係していることが予想された。なぜなら、規範は多くの場合明示文化されておらず、抽象的で実体が捉えにくいからである。人は社会生活を送る中で常に「望ましい」行動と「望ましくない」行動についての規範を作り出し、暗黙のうちに共有しているため、同一文化内でも状況によって「正解」にはばらつきがある。また、規範の内容や望ましいと感じられる程度は文化や集団によって異なる。人が、このように複雑な特徴を持つ文化規範を獲得する各段階における心理的メカニズムについては、未だ明らかでない点が多い。これまでの先行研究により、認知様式や自己観などの価値観の違いについて、文化的な特徴を持つ神経プロセスが関わっていることや、遺伝子多型の分布が文化によって異なることが指摘されている。しかし、これら生理心理学的な「違い」が生じるまでのプロセスについては、何らかの学習プロセスが関わっているということ以上に、議論が深まっていないのが現状である。

本研究では、強化学習理論を援用し、文化学習が他者や環境からの報酬と行動選択の相互作用に依拠する可能性を実証的に検証しようとした。行動パタンの選択と社会的フィードバックの経験を繰り返す中で、人はどのような行動が適応的で規範に一致しているのかについての学習を成立させていると考えた。文化的に望ましい行動は、他者や制度によって物質的ならびに心理的報酬が与えられることによって強化される。一方で、望ましくない行動には罰のフィードバックが与えられ、それを経験したり観察したりする中で「やってはいけない」行動と状況がセットで学習される。強化学習理論を援用した本研究の理論的仮説では、人は強化の法則を媒介し、特定の行動の選択率を調整するようになった結果、特定の行動の選択率を高めるような神経メカニズムが発達し、文化規範の学習が成立すると予想した。

さらに、自らの行動選択に対する社会的フィードバックから学習する「直接学習」に替わり、実社会では他者が同様の行動を行い、社会的フィードバックを得ることで、程度や内容を観察する「観察学習」においても、異文化規範の学習が成立すると考えた。客観的視点を通じた文化規範の学習では、どのような行動が最も効果的にポジティブなフィードバックに繋がるのかについての推定において、より俯瞰的な視点を獲得することができ、予測の誤差が少なくなると予想した。「人の振り見て我がふり直せ」のことがわざが示すように、規範学習を他者と共有することにより、結果的に社会全体において規範が共有されていくと考えた。

本研究の最終的な目的は、文化学習の心理的プロセスを明らかにすることで、環境や文化の変化への適応を目指す個人や団体に対して介入法方を提案することにあった。例えば認知傾向の個人差が文化学習に対するフィードバックの解釈に影響することを指摘することで、具体的にどのような個人に対してどのような異文化適応の方略が効果的であることを示すことができる。以上のような背景を踏まえ、以下の3つの目的のもと実証研究を行った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は次の通りであった。

- (1) 異文化規範を獲得する際の社会的報酬の効果を検討すること
- (2) 観察学習を通じた文化規範の学習効果を検討すること
- (3) 認知や性格の個人差を考慮した文化規範学習の具体的方略を提案すること

## 3. 研究の方法

研究計画書提出当初(2017年度)は、本科研課題は日本とアメリカの研究機関において文化規範の学習に関する神経メカニズムを解明するために事象関連電位を測定する目的で、実験を計画していた。しかし、申請者の異動により研究拠点が変更になったこと、出産育児による研究活動の中断期間を2度経験したこと、およびコロナ禍の影響で2020年度以降は実験室での実験実施が困難になったこと、など複数の要因の影響により、やむを得ず当初予定していた計画を変更したうえで、研究の遂行と目的の達成を優先させた。研究開始当初は実験室での実験を行い、コロナ禍では同様の実験パラダイムをオンライン上で再現できるようプログラムを開発し、実証実験を行った。以下に、主な研究の実施方法を説明する。

### 研究1:

実験室に設置したパソコンに e-prime ソフトを用いて規範学習を行うためのプログラムを作成した。大学生47名を対象に、まず異文化適応にかかわる個人差を測定するために、異文化間感受性尺度および外国人に対する偏見の程度を測定した。その後、1分間の休憩後、パソコン画面上に呈示される教示を実験者が読み上げることで、指示を理解していることを確認しながら実験を行った。

学習フェイズでは「アルバトロス」という異文化における単身留学の場面を想像してもらい、アルバトロスにおいて望ましい行動を学習するよう求めた。学習フェイズでは、予備調査を経て作成した短文の行動事例を呈示した（例：「女性優位」の規範例「男性は友人女性のために荷物を持つ」「同じ成績なら男子より女子学生を優遇する」/「感情表出」の規範例「友人の前で声をあげて泣く」「味の感想は大きさに表現する」）。

参加者には、それぞれの規範について4場面の行動例を呈示することで学習を促した。主な従属変数として、学習フェイズでは呈示しなかった別の社会的場面における規範行動例を呈示し、望ましさの判断を求めた。また、規範概念に対する望ましさの評定を求め、学習効果を示す従属変数として使用した。

#### 研究2：

オンライン上で実施可能な文化規範学習のプログラムを作成した。予備調査を経て選定した、架空のA国の人々が重視する4種類の価値ある対象物や事柄（猫、左、地面、新しさ）と関連する行動（遵守・違反各6例）のうち、価値を遵守している行動3例、違反している行動3例を学習フェイズの刺激として呈示した。

参加者206名をフィードバック条件（肯定・否定）×学習の主体（自己・他者）の4条件についてランダムな順序で呈示するよう設定した。フィードバックは顔写真を呈示することで行い、行動例の直後に、肯定フィードバックは笑顔、否定フィードバックは怒り顔を呈示した。具体的には、「これから示す行動をとっている【あなた自身/あなた以外の他者】を想像してください」と教示することにより、自己と他者（観察）学習を区別した。

テストフェイズでは学習フェイズで呈示しなかった遵守・違反行動の各3例を同一規範に関連する別文脈の行動例として呈示し、望ましさの評定を求めた。この研究では、行動の主体の効果を調整する個人差として、相互協調的自己観を測定した。

#### 研究3：

研究2と同様の実験パラダイムと材料を用いた。本研究では、フィードバックを受けた際の参加者の感情反応を測定することで、フィードバックの種類が学習効果に与える影響プロセスをより精緻に解明する試みを行った。

### 4. 研究成果

#### 研究1：実験室での異文化規範学習

「異文化感受性」のなかでも文化的な差異を尊重するという下位因子に対する得点が高い個人は、学習した異文化規範を別の社会状況に般化して判断する能力に優れていた。

上記の結果は、外国人に対する偏見および外国人との接触経験を統制した場合により強く認められた。

文化的差異を尊重しやすいと回答した個人は、学習した行動事例から望ましい規範概念を帰納的に推論する際の正解率が高いことが明らかになった（Figure 1）。

以上のことから、文化的差を尊重する程度は、偏見や外国人との接触経験の影響を統制した上でも、文化規範の学習において効率的かつ正確な成果を発揮することが示された。異文化学習において、自他文化の違いに対する柔軟な認知が必要となる可能性が示唆された。

行動事例をそのまま学習するだけでなく、それを上位概念の価値観として理解し、様々な社会的場面に汎用する能力には個人差があることを示すことができた。

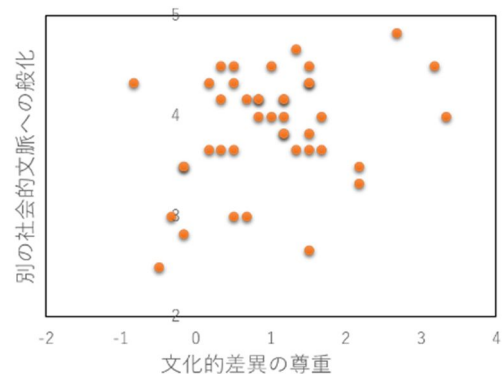
#### 研究2：オンラインでの異文化規範学習（自己・他者）

肯定フィードバックによる学習の方が否定フィードバックによる学習よりも、学習成績が良かった。

上記の効果は、相互協調的自己観が低い人においては、自己学習と観察学習いずれにおいても認められた。

相互独立的自己観が高い人は、特に他者学習において、肯定フィードバックと否定フィードバックの効果に違いがみられなかった（Figure 2）。

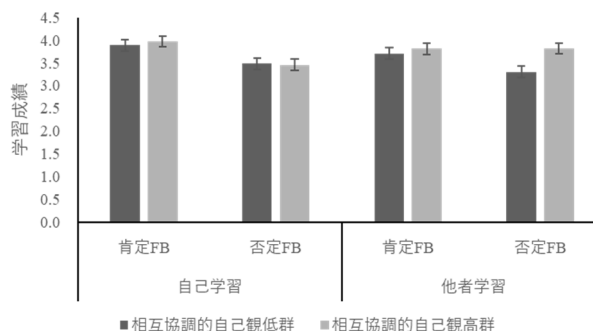
Figure 1. 文化的差異を尊重する程度（横軸）と学習規範を別の社会的文脈に般化する程度（縦軸）の関係。外国人への偏見と外国人接触経験を統制した場合の残差間の散布図



自他の区別をつけにくい協調的自己観が高い個人は、周囲の他者がどのような行動をとってどのような社会的フィードバックを受けているのかについても、異文化規範学習の貴重な材料であると捉え、自らの行動に生かすことができることが示唆された。

フィードバックが肯定的か否定的であるかにかかわらず、様々な社会的な刺激や反応から文化の規範を学習することは、効率的な行動選択と適応に繋がる可能性が指摘できる。

Figure 2. 相互協調的自己観群における学習主体およびフィードバックが学習成績に与える影響



### 研究3：感情経験が異文化規範学習に与える影響

フィードバック後に経験した感情は、肯定否定ともに、反応が強いほど学習成果との関連が強いことが明らかになった。肯定フィードバック後に「喜び」や「楽しさ」を感じた人ほど、その際に呈示された行動例から当該文化で望ましいとされている規範概念を正しく推測することができていた。同様に、否定フィードバック後に「悲しみ」や「怒り」を感じた人ほど、行動と関連する規範を正しく学習することができていた。

自己観の個人差が自己と観察学習の効果を調整するという研究2の結果については、追試されなかったため、今後さらに検討が必要であろう。

研究開始当初は、社会的フィードバックに対する感情反応が強いほど、報酬の予測誤差を強めるため、感情経験は異文化規範学習に不利に働くと予想していた。しかし、本研究の結果からは、適度な喜びや怒りの感情は、学習に対する動機付けを高め、規範の学習や行動事例からの帰納的推論を促進することが示された。予測誤差に対する感情反応の影響については、自己や他者が報酬や罰を経験した際の事象関連電位を調べるなど、生理的な視点を導入することによって明らかになるだろう。

今後は、実験室およびオンラインでのシナリオを主とした実験に限らず、神経生理学的手法を導入することで、異文化規範学習のメカニズムについての精緻な解明と提案が可能になると考える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 塚本早織	4. 巻 90
2. 論文標題 集団を区別する - 違いは本質にこそあると信じる素朴理論 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 心理学ワールド	6. 最初と最後の頁 online first
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Brown Christina M., Goto Nobuhiko, Tsukamoto Saori, Karasawa Minoru	4. 巻 2020March
2. 論文標題 Understanding collective guilt: Tolerance for contradiction and state-trait dissociations in perceived overlap between ingroup members	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Current Psychology	6. 最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s12144-020-00684-6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Atsunobu Suzuki, Saori Tsukamoto, Yusuke Takahashi	4. 巻 10
2. 論文標題 Faces tell everything in a just and biologically determined world: Lay theories behind face reading	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Social Psychological and Personality Science	6. 最初と最後の頁 62-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/1948550617734616	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Saori Tsukamoto & Susan T. Fiske	4. 巻 158
2. 論文標題 Perceived Threat to National Values in Evaluating Stereotyped Immigrants	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Journal of Social Psychology	6. 最初と最後の頁 157-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/00224545.2017.1317231	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 塚本早織・西山めぐみ
2. 発表標題 相互協調的自己観が異文化規範の学習スタイルに与える影響
3. 学会等名 日本心理学会大87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 塚本早織・西山めぐみ
2. 発表標題 異文化に対する態度が規範学習プロセスに与える影響
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塚本早織・Christina Brown
2. 発表標題 留学生の言語適応が内外集団の非人間化に与える影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第61回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塚本早織・Christina Brown
2. 発表標題 寛容さを予測する文化社会的要因と認知的完結欲求
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塚本早織
2. 発表標題 The effects of essentialist beliefs on pro-social attitudes: A prediction from behavioral ecology
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Julie Spencer-Rodgers, Kaiping Peng	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 638
3. 書名 The psychological and cultural foundations of East Asian Cognition	

1. 著者名 Julie Spencer-Rodgers and Kaiping Peng	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 664
3. 書名 The Psychological and Cultural Foundations of East Asian Cognition	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

米国	University of California, Irvine	Arcadia University	University of Michigan	
----	-------------------------------------	--------------------	------------------------	--